

高校生の学校ストレスに関する自己効力感、コーピング様式が 現実の行動・理想の行動に及ぼす影響

○若海 由美

尾崎 啓子

(埼玉大学大学院 教育学研究科)

(埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター)

1 問題と目的

現代はストレス社会であるといわれており、高校生も学校や家庭で様々なストレスにさらされている。高校生が学校生活で経験するストレスについて研究することは、彼らが学び成長していく上で生ずる困難を理解、予測し、問題行動やいじめ、不登校を未然に防止するための手がかりになる。ところが、高校生を対象としたストレス研究はほとんどないのが現状である。

ストレスに関する研究は、Lazarus & Folkman (1984) が提唱した心理社会的ストレス理論に基づいた研究が多い。しかし、実際にストレスを経験した時にその本人が行う現実の行動パターンや、本当はこうありたいと願う理想の行動パターンについて、自己効力感やコーピング様式の観点から、ストレスが個人に与える影響について検討した研究はほとんどない。

本研究では、高校生の学校ストレスに関する自己効力感、コーピング様式が現実に行う行動と理想とする行動にどのような影響を与えているかを検討することを目的とする。

2 調査対象

関東地方 X 県に設置されている県立高校3校(学力上位校、中位校、下位校)の生徒1~3年生の計681名(1年男子107名、女子125名、2年男子123名、女子110名、3年男子113名、女子103名)。

3 調査時期

2007年9月後半から10月前半に実施。

4 尺度構成

(1) 学校での出来事(ストレッサー)(神藤1999他)(2) 自己効力感(成田ら1995他)(3) コーピング様式(三川・上里2002他)(4) 現実の行動パターン(岡田2002他)(5) 理想の行動パターン、の5つを使用した。

5 結果

(1)~(5)までの各尺度について主因子法バリマックス回転による因子分析をした。その結果、(1)「不快ストレス」「快ストレス」「勉強ストレス」(2)「積極性」「挫折回避」「心配性」(3)「自己主張・相談」「思考の転換努力」「経験」「我慢」「放置」「攻撃」(4)「積極的問

題解決」「無気力」「大人への相談・問題解決」「友人への相談・問題解決」(5)「積極的問題解決」「無気力」「大人への相談・問題解決」「友人への相談・問題解決」の20因子を特定した。

(4)と(5)の4因子それぞれについて、差の有無を見るために分散分析を行ったところ、すべてにおいて有意差が見られた(すべて $p<.001$)。

この結果を踏まえ、(4)の各因子の因子得点から(5)の対応する各因子の因子得点を引いて作成した4つの因子を目的変数、(1)ストレス因子(3つ)、(2)自己効力感因子(3つ)、(3)コーピング様式因子(6つ)を説明変数として重回帰分析を行った。

各目的変数とストレス因子、自己効力感因子、コーピング様式因子との関連を以下に示す。

①「現実—理想：積極的問題解決」因子

「勉強ストレス」($p<.01$)、「挫折回避」($p<.05$)、「自己主張・相談」($p<.05$)と有意な負の相関、「経験」($p<.05$)と有意な正の相関があった。

②「現実—理想：大人への相談・問題解決」因子

「勉強ストレス」($p<.05$)と有意な負の相関があった。

③「現実—理想：友人への相談・問題解決」因子

「不快ストレス」($p<.05$)、「積極性」($p<.01$)、「自己主張・相談」($p<.01$)と有意な正の相関があった。

④「現実—理想：無気力」因子

「挫折回避」($p<.05$)、「放置」($p<.05$)と有意な正の相関、「経験」($p<.01$)と有意な負の相関があった。

6 考察

過去における経験を現在に生かそうとする意識がある場合には、積極的な問題解決に向かう傾向にあり、その意識が薄い場合には、無気力になりがちであることが分かった。不快ストレスが高いほど友人に相談する傾向にあり、勉強ストレスが高いほど大人には相談しない傾向がある。勉強ストレスを抱える高校生への大人のかかわり方に関して、今後さらに考察を深め、教員、親が高校生にとって有効な援助資源となる方法を検討したい。